



HARVARD | BUSINESS | SCHOOL

Funai Overseas Scholarship第5回報告書

武田悠作

ハーバード大学経営大学院 組織行動学科

www.hbs.edu/ytakeda

8/30/2018

博士課程生活の2年目も正式に終了し、3年目に突入した。履修必須科目は研究と無関係の一部を除き、ほぼ単位を取得した。去る7月には博士号取得に必要な博士論文の発表・ディフェンスを除けば一番の関門とされるQualifying Examを突破し、晴れてPhD Student（博士学生）からPhD Candidate（博士候補生）へと昇格した。これをもって、博士号取得までの道のりは、博士論文の執筆を残すのみとなった。



先日富山国際大学で行われた、シンポジウムで（重本さん、野田さんと）

研究

研究は極めて順調に進んでいる。過去1年間取り組んできた唯一の単著プロジェクトの初稿が完成した。ヤマハの歴史的経験の分析を基にしたイノベーション理論の研究である。内容変更や追加分析など、最終的な出版までにこなすことはまだまだあるが、初稿が存在しているので安心感がある。

博士課程の1年目より継続中の助教授との共同研究も、データ採取フェーズの中盤に差ししかかかってきた。莫大な研究費を投入しての研究だけに、データ採取だけでも数年を要している。最終的にインパクトのある研究に仕上がって欲しい。先日、この研究の一環で、テネシー州ナシュビルに出張をした。博士候補になったことで、このように対外的な付き合いが増えてきている。

また、昨年までハーバードの社会学部の博士課程に在籍していて、今年から経営大学院の私の学科に助教授として在籍している友人と新プロジェクトを立ち上げた。質的データ中心の前述の2プロジェクトとは打って変わり、全米全域のYelpのレビューデータを分析している。json形式の本データを統計

ソフトで読み込めるcsv形式に変換するだけでも丸半日要した。すでに、レストランの料理カテゴリーのステータス、レビュアーのエリートステータスとレビュアーのレビュー内容などに面白い関係性が見えてきており、結果が楽しみな研究である。

前述のヤマハ研究をベースに、少し視野を広くした形で博士論文を計画している。まだ計画書提出の前だが、いろいろな教授に相談をし、フィードバックを考慮しながら、最適な研究課題を選定していきたい。博士論文のコミティー（評議委員会）も最終選択の段階に入ってきている。

生活：柔道

学者としての生活に加えて、最近は私生活も非常に充実している。前回の報告書でも言及したが、昨年の秋頃から本格的に再開した柔道のおかげだ。本気で練習したのは実に5、6年ぶり、畳にあがったのも3年ぶりということもあり、最初は体が慣れるのに時間がかかった。最近は慣れてきて、現役時代のような動きが徐々にできるようになってきている。博士候補生になったことで時間の自由ができたので、これから博士号取得まで少なくとも向こう数年間は、研究と柔道の二本柱の生活をしていこうと考えている。指導者として教えながら、練習をしている。年度末までには現役復帰し、大会にも積極的に参加していきたい。



柔道仲間と



得意技の内股

自立した研究者へ

今回、博士課程の学生から博士候補生へと昇格したことにより、研究者としての心構えの転換期を迎えている。研究者としてのアイデンティティは今までも強く存在していたが、博士候補生となり、オフィスもアップグレードされ、一人の独立した学者としての意識が強くなってきた。それでも、心構えを変えるのはそう簡単なことではない。ここまで、分野内の考え方やコンセンサス、研究をどのようにデザインするかなど、周りにいる師匠ともいべき教授たちから学んできた。最近では、それらを踏まえた上で自分なりの考えを練る力が格段に増してきている。それにより、教授に言われたことと自分の思うこととの間に葛藤も生まれてくる。私よりも遥かに経験豊富な教授たちの意見も踏まえながら、自分なりにいかに考え、自分で責任の持った研究ができるか。これからもう一皮剥けなければならないと強く感じる。

一人前の研究者になるということは、ただ単著の研究をできれば良いというだけではないのである。自分の適性と分野内で行われている様々な議論や研究を踏まえ、自分なりの専門を切り開いていかななければならない。これは理論を理解する、研究手法を会得する、などとは次元の違う難しさである。これから10年や20年先の分野の将来を見据えて、分野になにが足りないか、どのような研究が分野をリードしていくのかを洞察する。さらには、企業経営・戦略がどのように変化していくのか。その中で自分はどのような役割を担うのか、そして、担うべきなのかの確信を得る。理論的に考えるだけでは答えの出ない問いと向き合わなければならない。しかし、これこそが、一流と二流の研究者の違いでもあるのだ。どうせやるからには、一流になりたい。



オフィスで